

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成23年4月5日発行(毎月5日1回発行)
第51巻4月号(通巻621号)

風土



4

涅槃変
神蔵器

立春や日向日陰を水流れ

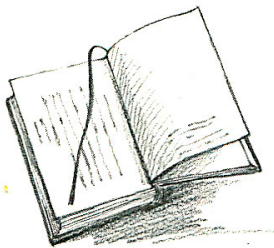
どぢやうにも仏在せり涅槃変

日の暮れて磧の白し西行忌

かうかうと雪降る中の星一つ

大擲四本先に寒の明く

都庁より西に住ひて葱の花
能面の柱にかかる二月かな
白梅を見て紅梅の芳紀かな
まつすぐに茶柱立てり春の雷
鬪鶏の爪研ぎすます社日かな
水に手を洗ひてをれば春満月
桂郎の亡き歲月や柿芽吹く



竹間集

同人作品



寒念仏

大竹淑子

初社尺余の雪を踏みしめて
初詣若狭・養心寺五句赤子に雪の道ゆづる
作務小屋に残る木の香や冬深む
雲水の留守や朔風扉打つ
雲堂の半ば埋もるる深雪かな
寒念仏辻に草鞋の雪落とす
寒行の帰山の笠を脱ぎて稚し

寒椿

宮川みね子

ひと握りほどの日溜り冬すみれ
鏡割遠くの山が近く見え
音大のステンドガラス風花す
雪催音なくつもる砂時計
水仙花日の煌めきて怒濤かな
寒椿離したる手のまだあつき
風花の大きく来たる薬医門

初不動

浜福恵

除夜の鐘手にクリームを塗りながら
除雪車の行き着く地点比丘尼塚
寒の水かたかた鳴らし芋水車
舟小屋の切れ目は路地へ寒雀
網つくろふ足だけみえて花の内
一斉に鴨の飛翔や初不動
寒林の晴れて兎のやうな雲

春を待つ

鈴木とおる

寒林の一山守り王禪寺
出しぬけに芦ノ湖打つて冬の雷
娘と二人祝ふ雑煮の温かし
四日はや九十二歳の誕生日
松過ぎのもとの一人となりにけり
丹沢の上に富士の嶺寒晴るる
眼の下の病院の子と春を待つ

水かげらふ

外川 玲子

三月の光りとびつく峡の空
雪の竹しなやかにあり風すこし
初春のわが八十の歩なりけり
春障子細めに京の一と夜かな
バスタオルこはばつてみて寒明くる
海に雪青森行きの深夜バス
水かげらふ寄り添ふ影のすぐ消ゆる

ふるさと

山田暢子

道に出て待つ救急車息白く
三寒や入院するに旅靴
初日待つ眼下に月の海を置き
餅のなき雑煮白寿となられけり
息白し子は父よりも前走る
少しづつ忘れてゆく日梅ひらく
福寿草ふるさとの山みな低し

青木の実

門伝 史会

あらたまの吉書の墨を含ませり
未知の日を一巡りして初暦
折りたたむやうに日の過ぐ三日かな
賞称西土屋賞ふ寒中見舞となりにけり
寒鯉の向きを変へたる池の波
三寒に立ち向かふ山見てゐたり
青木の実一番寒き日と思ふ

花の季

— 外川 玲子 —

吊るし雛潮の匂ひのとどきけり
風生のさくらの中に風とゐる
雪兎よく野を駈ける夢をみて
一本のさくら詠へば応へけり
春どかとむらさき橋の暗さかな
蛤の閉ぢたる殻の闇一つ
さくら一句たどり着けずに日暮かな
いつせいに辛夷の空となりにけり
図書館にしづかな花の刻流れ
粗壁に淡き影あり夕ざくら

山河集

同人作品



神蔵
器選

露天湯に雪の降り込む大旦
初雀発ちて雪片散らしたる
餅一つ減らしてもらふ雑煮かな
友の賀状万年筆の太字かな
日本間に墨の香のたつ二日かな

十并 三乙

百柱に百の鱸綱初明り
下山田美江

紅絹磨く漆器の艶や風花す
卓上の薔薇“万葉”や読初す
秩父路は仏の里や若菜摘む
森に神山に仏や初鴉

白寿まで一步踏み出す寒椿
紋付きの衣桁に垂るる四日かな
人日や蹲の水張りなほす

及川 澄江

美しや切り口揃へ寒の餅
大寒の四角に揃へ男下駄

森高きよこ

師は一人鎌倉の谷笹子鳴く
耳痛くなるほどの風冬の川
海に入る川幅に張る氷かな
風花や丸太づくりの喫茶店
古民家の葺替の人青空に

相澤 春江

初参り浅草寺に受く火伏札
雪吊りの杭一本は池の中
東照宮の甚五郎の竜寒牡丹
つくばひに椿一輪芙美子邸
夕暮れの厄除け札の浅草寺

冬木立

橋本
之宏

冬の雁モンローのごと畦歩む
寒鯉の僅かに鱭の動きけり
晴天や高層からの雪の富士
間違ひのフアックス届き時雨けり
冬の日を顔に当て観世音
冬めくやクレーン吊すシルエツト
北風や人群れ通す雷門
参道を飾る櫂の冬木立
福寿草肩寄合ひて咲きにけり
北風や鬼子母神への石の道

風土独語／神蔵器



森に神山に仏や初鴉

下山田美江

この句は席題、それも「袋回し」で出来た句という。鴉は平素はあまり好かれていない、と言うよりむしろ嫌われているが、初鴉となると一変して、あの声も明るくめでたいものに聞こえ、まがまがしく見えた漆黒の羽も「髪は烏の濡れ羽色」などと美人の黒髪的美しさにたとえられたりするほどで、気品あり神々しくさえ見える。

さて、袋回しでは時間が無い。作者に最初に回って来たのは「初鴉」、作者は自分の知るかぎりの初鴉との接点を想い出し求めた。最初に思い出したのは生まれ育った故郷の産土神、不断は森の中にしーんと静まりかえっている神社であったが、元旦には一番先に鴉が集まって来て賑やかだ。ついで山の仏、おそらくこの仏は亡き父母をはじめ先祖代々の人たちであろう。初鴉はこれらの人を早々に目覚めさせ、新年のよろこびを配っている。ということとは、初鴉は生きとし生けるものの総べてに幸せを運ぶ太陽の使者であり、神の使いであるようだ。

朱より紅深む夕焼け日脚伸ぶ

柿沼 盟子

朱も紅もアカである。その違いは私にはよく解らないが、紅は桃色がかったアカ、鮮やかなアカであり、赤である。朱は少し橙色に近いアカのようだ。

太陽が西に傾き、西の空は明るい白みがかった丹に全体がいろどられるが、その範囲はだんだん狭くなり、間もなく朱に染まり刻々と朱が濃くなり、朱より紅にうつり、さらに紅を深くしてゆく。赤々と燃ゆる夕日がこの間に次第に沈み、最後の夕焼けが夕空に一時、紅のはなやぎに燃え輝いたのだ。

なお、日脚伸ぶは冬の季語であるが、人々がはつきりとそれを感じるのは一月も下旬頃からで、この句の夕焼けには確かに春近しのよろこびが感じられる。

懐剣のやうに寒紅抜きにけり

浅田 光代

さて、浅田さん、これから何処へ出掛けるのですか。会社か、それとも親の敵を討ちに行くのですか。何れにしても容易ならざる外出と推察される。

しかし、私は作者であれば、おそらく句会ではないかと思う。それも月例の句会。と言っても作者は決して肯定はしないだろう。ただ、懐剣をぬくとという敵しい動きにもかわらず、この一作を貫く気息は無類に静謐で澄みきっているということだ。対人関係では考えられない。この日の句会の成果を早く知りたい。(以下略)

風土集



神蔵器選

ひた寄するもの一つに湖の雪 津山 生田 作

藪暮れて雪ふる音となりにけり

寒雀来てゐる音の板廂

笙鳴や風収まりし雑木山

大霜や村の百戸へ日の届き

若菜摘む思ひの外の長き根と

餅花の紅に濃淡ありにけり

朱より紅深む夕焼け日脚伸ぶ

蔵の戸の音なく開く四温かな

寒卵しづかに落とすフライパン

ひとすぢの日矢のとらへし鮎舟

柱なき家に住みなし七日粥

凍蝶の空を忘れしごとくゐる

徹寒の唇の尖つてきたりけり

懐劍のやうに寒紅抜きにけり

東京

柿沼 盟子

高槻

浅田 光代

わたつみに注ぐ大河や初日さす 川崎 直井たつろ

寒梅のこの世の外に咲きてぬし

大寒の足裏貼りつく庭の下駄

悲しびは凍田を過ぐる風の声

木の葉散る石山寺の下向道

門松の切つ先風を揃へけり 上尾

潮騒や川遡る初明り 根岸 善行

無に一步踏みだす初明りかな

初夢に来て意地悪なことを言ふ

七草のみどりや後期高齢者

物干の棹の雫や初日の出 さいたま 竹生田勝次

初鶏の小学校に刻をつぐ

姿見にネクタイ正す四日かな

賀状受け急に逢ひたくなりけり

未吉のみくじを胸に春を待つ